



SEMPO Museum

の政権を取り、ナチズムによるユダヤ人迫害がヨーロッパを覆うようになる

東京の京橋、駅からほど近いビル
の2階に小さなミュージアムがある。
入口のパネルには「杉原千畝
SEMPO MUSEUM」の文字
がある。第2次大戦中、ナチスの迫
害に遭い助けを求めてきたユダヤの
人々を助けるために日本を通過する
ビザを発給したことで知られる、か
の杉原千畝の功績を伝えるために置
かれた施設である。因みにSEMPO
とは千畝の湯桶読みであり、「チ
ウネ」を発音しにくい海外の人のた
めに杉原が名乗ったという。
ヒットラー率いるナチがドイツ

悲しみと感謝の連鎖か
怒りと憎しみの連鎖か



リトアニア カウナス領事館の杉原千畝
(NPO 杉原千畝命のビザ)

と、まずポーランドが侵略され、そ
こから逃れたユダヤの人々は中立国
であるリトアニアに逃げ込む。ここ
ろがそこにソ連軍が進駐したことか
ら、実質的にソ連に併合されること
となり、これによって再びユダヤの
人々は逃避を余儀なくされた。しか
しもはやヨーロッパ全土はナチスの
影に覆われ、行き場を失ったユダヤ
の人々はヨーロッパを出てアメリカ

など第3国を目指すしかなかったの
だ。そのために日本を経由して第3
国に渡るための通過ビザを取得しよ
うと1940年7月、日本領事館に
殺到したのだ。
リトアニアのカウナスにあった日
本領事館に領事代理として赴任して
いた杉原千畝が「命のビザ」として
知られるビザを発給した数は1ヶ月
間で2139通にもなる。千畝は本

ジャーナリスト

三木寛郎

国日本の外務省に、領事館の前に集
まるユダヤ系難民たちの窮状を訴
え、通過ビザの発給許可を打診する
がその許可は得られないままであっ
た。一刻の猶予もない状況下で、千
畝は独断でビザの発給を決意した。
戦雲の影が迫る中、カウナスの日本
領事館自体にも危険が迫り、8月に
は領事館が閉鎖され、千畝の一家も
9月4日に鉄道でカウナスを離れる
ことになったが、その旅立つ千畝を
追って、ユダヤ系難民たちは駅にま
で押し寄せ、最後のビザは動き出し
た列車の窓から発給されたといわれ
ている。このビザのおかげでユダヤ
系難民約6000人の命が救われた
という。
一般にホロコーストと称されるユ
ダヤ人の大量虐殺が始まるのはその
2年後、1942年のことである。
しかも多くの虐殺はドイツ国外で行
われたことを考えると、千畝が発給



イスラエルのリブリン大統領

したビザによって生命を救われた人々の思いは計り知れないものがある。

京橋の「杉原千畝 SEMPO MUSEUM」には、その名前が刻まれたパネルが展示されている。

アウシュビッツ

強制収容所追悼式典

アウシュビッツ強制収容所が解放されて75年の節目となる2020年1月27日、ポーランド南部オシフイエンチムにある収容所跡において生存者約200人や関係国の首脳らが参加して追悼式典が行われた。

そこで壇上に立った生存者のひとりであるマリアン・トゥルススキ氏(92)は、そのスピーチの冒頭に「私

が言うことには感情的な部分があることを許してください」と前置きをして話した。しかしそのスピーチは悲しみを湛えたものであったことは間違いないが、悪戯に声を荒げることもなく、誰かを誹謗中傷するような言動もなく、いかにホロコーストが、そして戦争が悲惨なものであったか、その悲しみを後世に伝えることがいかに大切であるかに終始するものであった。

それに先立つ1月23日、エルサレムで行われたホロコーストの犠牲者を追悼する式典で、イスラエルのリブリン大統領は世界40カ国以上の首脳を前に、「反ユダヤ主義に立ち向かうため強い連携を示してくれたことに感謝する」と述べている。

ナチによるユダヤ人大虐殺の犠牲者を悼む式典において、生き残りの1人が伝えた「悲しみ」。イスラエルの大統領が伝えた「感謝」。それは絶えることなく後世に伝え、二度と繰り返されることがないようにするためのメッセージにほかならない。

それが、感情むき出しで憎しみを持って語られたのではないことに大

きな意味がある。それこそ、大人が大人として大人に伝えるメッセージなのではないだろうか。

「憎しみ」と「怒り」の連鎖?

戦争というのは文字通り非常時であり、今我々の周囲に流れている何気ない時間の経過とは異なるものである。有事という言葉でも表現されるように、通常の物差しが通用しなくなる事態である。もちろんそこに巻き込まれた人間も日常ではいられない。加害者と被害者双方にとっても悲劇であることであるし、いつでも加害者は被害者に成り得るし、その逆もまた起こりがちなことである。つまり戦争というのはいずれにいつとも悲劇なのではないだろうか。

悲劇から75年を経過して、冷静にその悲劇を振り返り「悲しみ」と「感謝」を訴えることでその事実を後世に伝え、再度同じようなことが起きないような戒めとして表現する人々がいたら、75年を経てなお感情を高め「憎しみ」と「怒り」をもつて対峙する相手を罵倒し、罵詈雑言を浴びせることを外交とする向きも

ある。

しかし「憎しみ」と「怒り」の連鎖からは次の戦争しか生まれては来ない。そして「憎しみ」と「怒り」の連鎖は繰り返されていくのだ。

冒頭に記した杉原千畝の実話にはこうした後日談がある。戦後杉原千畝とその家族3人はルーマニア・ブカレスト郊外の収容所に収監される。自分自身が収容所生活を余儀なくされたのだ。1946年によくやく収容所から解放され、艱難辛苦を乗り越えて翌1947年にウラジオストクからようやく帰国するのだ。ところが帰国した杉原千畝を待っていたのは、独断でビザを発行したことの責任による外務省からの解職であった。

後年、千畝はこう語っている。

「私のしたことは外交官としては間違ったことだったかもしれない。しかし、私には頼って来た何千人もの人を見殺しにすることは出来なかった。大したことをしたわけじゃない。当然のことをしただけです。」千畝が発給したビザによって救われた命は、その子孫も合わせると25万人以上にも及ぶと言われている。